

〈研究ノート〉

書き言葉におけるシ節の使用について

— 文体情報記述のための試論 —

小 井 亜津子

要 旨

本稿は、等位節とされるシ節の文体的特徴について、特に硬い書き言葉としての容認度の観点から考察したものである。まず、大学生の作文におけるシ節の使用実態を調査したところ、一文にシ節を一回だけ使用する累加用法を中心に、一定程度の使用が確認された。次に、得られた用例からタイプが異なる17例を選び、文体に関する意識調査を行った。結果は個人差が小さくないものの、一定の傾向が明らかになった。具体的には、ナ形容詞のようにシ節の前節語が「だ」で終わる場合や、一文内で複数のシ節を使用している場合は、硬い書き言葉として容認されにくい、「～だろう」が共起する場合は容認されやすい、といった傾向が見られた。調査協力者からは、研究分野やテキストの主題によって容認度が異なるという指摘もあり、卒業論文等を執筆する大学生へのライティング指導のあり方に対して、一定の示唆が得られた。

キーワード：書き言葉、シ節、文体、ライティング指導

1. 研究の背景と目的

本稿では、「大学生は課題が多いし、将来へのプレッシャーもあるし、心理的ストレスが大きい」のようなシ節の使用について、文体に注目して考察する。経験上、大学生の文章でシ節が多用されていると、なんとなく幼い印象を受けることがある。しかし、一部のライティング教材には、書

き言葉でのシ節の使用を容認しているものもあり、シ節の文体についての明確な共通認識がないように思われる。

大学生はレポート課題や卒業論文などで、硬い書き言葉の使用を求められるが、特に留学生にとっては文体の硬軟を判断して使い分けることは容易ではない。「この文法形式は完全に話し言葉である」とか、「この語彙は学術論文レベルの書き言葉でしか使われない」といった、基準が明確なものであればまだよいが、実際には話し言葉と書き言葉には連続性があり、どちらかに決まる語彙や表現形式ばかりではない。また、時代による変化、世代による受け止め方の差などもあると予想される。

さらに、ある文法形式の文体情報の判断については、その形式が置かれた環境も影響すると考えられる。たとえば「とか」という形式は一般に話し言葉として認識されており、留学生向けの教材でも、「コーヒーとか紅茶だけ」という表現は、書き言葉では「コーヒーや紅茶だけ」に修正するよう指導されている（石黒・筒井 2009 : 75）。しかし、実は本稿において筆者は「とか」という形式を使用した（前の段落の2文目）。「とか」が名詞に後接する場合は、たしかに「や」と置き換えることで書き言葉らしくなると言えるが、「とか」が述語相当の形式に後接する場合は、硬い書き言葉の文体であっても、容認度が上がると考えられる。

シ節についても、硬い書き言葉として容認されやすい／されにくい使い方（環境）があるのではないだろうか。本稿では、そうした問題意識から、書き言葉におけるシ節の使用例を収集し、どのような場合に書き言葉らしくないと判断されるか、そして、硬い書き言葉でも容認されやすい使用環境はどのようなものかを考察することとする。

以下、第2節で先行研究を整理し、第3節では研究方法を説明する。第4節では日本語母語話者と中国語・韓国語を母語とする日本語学習者の作文データから得られた用例をもとに、書き言葉におけるシ節の使用実態を記述する。第5節では、一部の用例に対し行った、シ節の文体に関する意

識調査の結果を述べる。第6節で結論と今後の課題を述べる。

2. 先行研究

2.1 シ節の用法と形式的特徴

日本語記述文法研究会編（2008）では、シ節は「等位節」と位置づけられており、「累加⁽¹⁾」と「理由」の2つの用法があるとされるが、次に示すように、両者は連続的なものである（以下、日本語記述文法研究会編2008：264-265をまとめ直し、若干補足も加えている）。

- (1) 山本君は、勉強ができるし、おもしろい。
- (2) 山本君は、頭はいいし、優しいし、いいと思うよ。
- (3) 山本君は、頭はいいし、いいと思うよ。

「累加」の用法は(1)のように「勉強ができる」と「おもしろい」という複数の事態が成立することを、「～だけではなく～も」という「累加」の気持ちを込めて並べるものである。この点が、同じ等位節であるテ形や連用形などによって並べた場合との違いである。

(2)のように主節（「いいと思うよ」）との関係が従属的になると、シ節は主節の帰結を導く判断材料（＝理由）を表す。(3)は判断材料となる事態が1つしか挙げられていないが、ほかにも挙げることでできる事態があることを暗示する。一方、「累加」用法である(1)も、なぜ「累加」の気持ちを込めて述べるかと言えば、前文脈、あるいは後文脈での判断を補強するためだと考えられる（たとえば、「だからいいと思うよ」が続く）ので、「累加」と「理由」の連続性が認められる⁽²⁾。

形態的特徴についても重要な点を見ておきたい。日本語記述文法研究会編（2008：255）では、等位節の特徴として、従属節の中でも主節に対する従属度が格段に低いことを指摘している。まず、(4)のように、節の中に主題の「は」が問題なく現れる。また、(5)のように主節が丁寧体であ

れば、シ節を丁寧形にすることも問題ない。さらに、(6)のように典型的な従属節では現れにくいモダリティ形式も現れる。

(4) お父さんはは歌舞伎役者だし、お母さんはは宝塚の女優だ。

(5) 温泉にも {入った／入りました} し、おみやげも買いました。

(6) 就職はしない {だろう／ようだ} し、進学するつもりもなさそうだ。

他の従属節では現れにくいモダリティ形式が現れるという点は重要である。同じ等位節であっても、テ節と連用中止節は「だろう」と共起できないので、並列的な用法（シ節としては「累加」用法）では「～だろうし」という形式のみが存在するということになる。「理由」の場合、「だろう」はカラ節には前接するがノデ節には前接しないので、書き言葉において「～だろうし」が一定の役割を果たしている可能性がある。

なお、「累加」にも「理由」にも終助詞的な用法（あるいは「言いさし」の用法）が見られるが、これについては話し言葉とみなすのが妥当なので、本稿では扱わない。

2.2 シ節の文体に言及している研究や教材

シ節の基本的特徴を確認したところで、続いて文体に関わる情報に言及している資料を見ていきたい。

まず、北條（2002）を挙げたい。北條（2002）は、多くの日本語学習者向けの教科書で「～し、～し、～ {マス／デス}」の形で置かれている文型について、いくつかの疑問を挙げて考察したものである。その中に「話しことばと書きことばで使われ方に違いがあるのではないか」という問題意識があり、結論の一部に、「書き表現では2つの「～し」もあるが、会話表現では1つの「～し」が現れることが多いようである」（p.231）という指摘がある。「書き表現」の定義は不明であり、用例が非常に限られているため結論の妥当性には疑問があるが、教科書で文型として示されてい

るものと、使用実態との比較という視点は重要である。

次に、日本語教師が参照することを想定した参考書を確認する。『初級日本語文法と教え方のポイント』（市川 2005）では、「理由」用法を「ゆるやかな理由」と名付けて解説しており、「から」や「ので」が直接的に理由付けをしているのに比べると、理由付けがゆるやかで、ほかした感じになります。その分、会話的で遠まわしな感じを表します。」(p.386), 「話し手の気持ちの入った、その点ではムード（モダリティ）の性質を持った並列表現と言えます。」(p.387) という記述が見られる。この指摘が妥当であれば、客観性を重んじるような硬い文体では、シ節による理由付けはされにくいということになる。類似の参考書である『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（庵他 2000）には、特に文体に関する言及はなかった。また、『教師と学習者のための日本語文型辞典』（グループ・ジャマシイ 2023）も、シ節の用例は豊富だが文体についての情報はなかった。

続いて、文章表現の教材を確認する。まず『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』（二通・佐藤 2020）には、「値段が安いし、品物がいい」は「話し言葉の表現」で、「である体」の文章（レポートや論文の文体）では「値段が安く、品物がいい」を使うとしている（p.5）。シ節について示されているのは、累加用法のこの例のみであり、すべてのシ節が「である体」として不適切なのかどうかはわからない。一方、『留学生のためのここが大切文章表現のルール』（石黒・筒井 2009）では、シ節を話し言葉とはみなしていないようである。「話し言葉の表現に線を引き、適切な表現に直してください」という「問題」の中に、「ときどき寝坊して朝ごはんを食べないで学校へ行くと、午前中は眠くて授業に集中できないし、すごく疲れやすくなる。」(p.74) という文があるが、次ページの「解答」を見ると、「できないし」は修正対象になっていない。さらに、下線部を修正するよう求める問題である「練習 1」(p.80) でも「私の会社は

小さいし有名じゃないけど、優れたエンジニアがいっぱいいる。」という文があるが、「小さいし」については修正対象とされていない。このほか、『小論文への12のステップ』（友松 2008）も見てみたが、テ形を連用中止形に直す練習は重視されているが、シ節に関する言及はなく、例文でも扱っていない。

最後に、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）をもとに、初級の文法形式についての量的な情報提供を行っている『文法コロケーションハンドブック』（中俣 2014）の関連記述を見ておこう。それによると、BCCWJ から抽出したシ節 1000 例のうち、72%は「並列」の用法であり、「理由」の用法は「Yahoo! ブログ」や「Yahoo! 知恵袋」にやや多く、話し言葉的であるという（p.54）。市川（2005）の「ゆるやかな理由」は会話的であるという指摘と重なるところがあると言える。

2.3 先行研究から見えてきた考察の観点

ここで、先行研究を通して見えてきた考察の観点をまとめてみたい。

まず、形式と用法の分類から、シ節を伴う文の類型を、下記のように整理する。

(7) 本稿におけるシ節を伴う文の類型

- A 累加 [事態 1] シ, [事態 2]。
- B 累加 (複数) [事態 1] シ, [事態 2] シ, [事態 N]。
- C 理由 (ほかし) [事態 1] シ, [帰結]。
- D 理由 (複数) [事態 1] シ, [事態 N] シ, [帰結]。
- E 理由 (混合) [事態 1] シ, [事態 N] ノデ (など), [帰結]。

「累加」は並び立つ事態が2つ（1つのシ節と主節）であればA型となり、3つ以上あればB型となる。「理由」はシ節が1つであればC型となり、2つ以上あればD型となる。さらに、「理由」の場合、「山本君は、頭もいいし、優しいので、いいと思うよ」のように、並び立つ事態をシ節以

外の節で述べる場合があるが、これはE型としておく⁽³⁾。本稿では、収集した用例をこの5つの類型に分類した上で、以下のような点を考察していきたい。

(8) 考察の観点

- ① 書き言葉において、初級教科書に見られるような、一文に複数のシ節を含む文型(B型およびD型⁽⁴⁾)はどの程度使用されているか。また、そのような複数性は書き言葉らしさに影響を与えるか。
- ② 書き言葉において、「累加」と「理由」の使用に偏りはみられるか。特に、「理由」の「ほかし」「遠まわし」といったニュアンスは硬い文章に適さないとと言えるか。
- ③ 「だろうし」という形式は他には置き換えにくいので、書き言葉でも一定の役割を果たしていると考えられるが、シ節にモダリティ形式を含むか含まないかは、書き言葉らしさに影響を与えるか。

3. 研究方法

本稿における考察の手順を大まかに述べると下記ようになる。

- ① 大学生の作文コーパスからシ節を用いた文を収集し、使用実態を概観する。
- ② 収集した用例から文の類型、使用環境が異なるものを取り出して整理し、それらを対象に文体に関する意識調査を行う。

本節では、①のコーパス調査を中心に説明し、②の意識調査についても概要を述べるが、意識調査の詳細は第5節で説明することとする。

本稿では、書き言葉におけるシ節の使用実態を把握するために、日本語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者による日本語作文を収録して

いる「JCK 作文コーパス」を利用する。インターネット上で公開されている情報 (NihoNgosAkuBuN.sAkurA.NE.jp) によると、同コーパスの概要は (9) および (10) の通りである。

(9) JCK 作文コーパス執筆者の情報

- 日本語母語話者：日本在住の日本人大学生（執筆期間：2013年12月～2014年1月）
- 中国語母語話者：JLPT の N1 合格者および合格相当の力を持っていることが確認された、中国在住の中国人大学生（執筆期間：2013年12月～2014年2月）
- 韓国語母語話者：JLPT の N1 合格者および合格相当の力を持っていることが確認された、韓国在住の韓国人大学生（執筆期間：2014年3月）

(10) JCK 作文コーパスの課題の種類と数

以下の3つの課題についての2000字程度の作文180本（3課題×20本×3母語話者）。

- 説明文「自分の故郷について」：客観的な主張であって、主観的にならないように書く。
- 意見文「晩婚化の原因とその展望について」：説明ではなく、根拠とともに自分の主張を書く。
- 歴史文「自分の趣味（昔から続けていること）について」：時間軸に沿って、ある出来事や経緯を書く。

「作文」というと、学術論文や大学の授業で課せられるレポートに比べると、書き言葉としての「硬さ」は下がると考えられる。しかしながら、同様のテーマ、条件下での母語話者・非母語話者の比較がしやすい点や、コーパスの利用のしやすさなどを考慮し、今回はこの範囲内での使用実態を確認することとした。なお、字数節減のため以下では日本語母語話者を JS、中国語母語話者を CS、韓国語母語話者を KS とする。

JCK 作文コーパスの検索ページで「し」を含む文字列を検索し、目視でシ節を含む文を取り出した（調査期間は2023年8月）。シ節を含む文1文を1例と数えると、211例（JS 85例、CS 30例、KS 96例）の用例が確認できた。

次に、これらの用例から、類型や使用環境が異なる例として17例を取り出し、それらを対象に文体に関する意識調査を行った。シ節を含む文の前後2～3文を1単位としたテキスト17種類を協力者に提示し、「硬い書き言葉」としてふさわしくないとと思われる部分をチェックしてもらうというものである。2023年9月～10月にかけて、日本語教育に関わる母語話者6名に加え、非母語話者3名の協力を得て調査を行った。

4. 大学生の作文におけるシ節の使用実態

本節ではJCK 作文コーパスにおけるシ節の使用実態について記述する。

表1に、母語別・類型別の用例数を示した。類型は2.3節(7)で示したA～Eに対応している。「*」は使用が不適切であると判断したものである。単純に計算すれば、180本の作文で211例なので、大学生（日本語学習者を含む）が2000字程度の作文を書けば、平均して1文程度はシ節を含む文が出現することになる。以下、「母語と個人差」「類型と課題の種類」「モダリティ形式との共起」という観点に分けて考察してみたい。

表1 JCK 作文コーパスにおける母語別・類型別シ節を含む文の数

	A	B	C	D	E	*	合計
JS	70	3	5	0	7	0	85
CS	13	5	2	8	0	2	30
KS	80	3	7	0	6	0	96
合計	163	11	14	8	13	2	211

まずことわっておくと、JS の場合は、一人の人物が3つの課題で作文を書いているため、執筆者の異なり数は20人となる。一方、CS・KS の場合は、同じIDの人物が3つの課題すべての作文を書いている場合もあれば、2つの場合も、1つのみの場合もある。IDから判断すると、CSの異なり数は42人、KSの異なり数は24人である。

母語別に見ると、一見してJSとKSは使用傾向が重なるのに対し、CSは全体的に使用数が少ない。今回は特にCSとKSの比較をすることを目的としていないが、差が大きいので気になる点である。CSのみ執筆者の異なり数が大きいので、JSとKSは特定の人物が偏って多く使用している可能性があるだろうか。そこで、使用回数が0の人物を数えてみると、JSでは20人中2人、KSでは24人中4人である。JS・KSでは、多くの人が1回以上はシ節を用いていることがわかり、極端な偏りがあるわけではないことがわかった。

ほかに指摘できる点として、KSは丁寧体で書かれている作文が60本中51本と、非常に多いということがある。そこで、丁寧体の作文と普通体の作文でシ節の使用率に差があるかを見てみた(表2)。KSでは確かに丁寧体のほうがシ節の使用率が高くなるが、JSとCSでは逆に普通体での使用率の方が高い。この結果からは丁寧体か普通体かという違いがシ節の使用率に影響を与えているかまでは判断できない。

表2 丁寧体／普通体の作文におけるシ節を含む文の使用率

	丁寧体での使用率 (例数／本)	普通体での使用率 (例数／本)	全体での使用率 (例数／本)
JS	1.38 (22／16)	1.43 (63／44)	1.42 (85／60)
CS	0.37 (7／19)	0.56 (23／41)	0.50 (30／60)
KS	1.75 (89／51)	1.29 (7／9)	1.63 (96／60)

次に、シ節を含む文の類型別および課題別の用例数に着目する。課題別の用例数は表 3-1～3-3 に示した通りである。累加用法の A 型（[事態 1] シ, [事態 2]）が、全用例数の 77% を占めている。課題別では、歴史文での使用が最も多い。（以下、用例のカッコ内は、執筆者の母語, ID, 課題の種類, シ節の類型を示す）。

- (11) 交通の便も良く、すぐに各地から来ることができるし、横浜内の移動もバスが頻繁に往来している。(JS, j14-1, 説明文, A 型)
- (12) 昔は結婚が当たり前であったし、女性が家を守るものだと考えられてきた。(JS, j11-2, 意見文, A 型)
- (13) 近くの峠には数えきれないほど挑戦したし、部活の仲間と数週間のツーリングにも何度も出かけた。(JS, j10-3, 歴史文, A 型)
- (14) 自転車は私の全てを変えてくれたし、今も変えています。(KS, k06-3, 歴史文, A 型)

表 3-1 「説明文」における母語別・類型別シ節を含む文の数

	A	B	C	D	E	*	合計
JS	15	0	1	0	1	0	17
CS	3	0	0	1	0	2	6
KS	27	1	0	0	5	0	33
合計	45	1	1	1	6	2	56

表 3-2 「意見文」における母語別・類型別シ節を含む文の数

	A	B	C	D	E	*	合計
JS	23	0	3	0	1	0	27
CS	4	2	2	7	0	0	15
KS	27	0	4	0	0	0	31
合計	54	2	9	7	1	0	73

表 3-3 「歴史文」における母語別・類型別シ節を含む文の数

	A	B	C	D	E	*	合計
JS	32	3	1	0	5	0	41
CS	6	3	0	0	0	0	9
KS	26	2	3	0	1	0	32
合計	64	8	4	0	6	0	82

累加用法のうち、シ節を複数含む B 型は「歴史文」を中心に 11 例見られた。

- (15) カンボジアのアンコールワットでの夕焼けは今まで見た景色の中でも格別であったし、東南アジアの様々なエスニック料理を味わうことができたし、貧乏宿で出来た海外の友人と酒を飲みながら一晩中語り明かしたりもできた。(JS, j08-3, 歴史文, B 型)
- (16) 授業中にも机にどんと敲くし、やたらに喋るし、非常に悩まされる学生になった。(CS, C57-3, 歴史文, B 型)

先行研究では話し言葉的とされている理由（ほかし）用法の C 型（[事態 1] シ, [帰結]）は、JS で 5 例、CS では 2 例、KS では 9 例確認された。ただし、C 型は A 型との違いがはっきりしないものもある。本稿では「し」を「ので」と置き換えられそうなものを C 型と判断しているが、たとえば (18) では「窮屈と感じられること」と「縛り付けられてしまうという感覚がぬぐえない」ことは累加の関係と解釈することも可能である。

- (17) 公演の日は、私が既に所属していた弓道部の練習もあったし、そんな退屈に思えるものに一時間も使いたくなかったのである。(JS, j13-3, 歴史文, C 型)
- (18) それが窮屈と感じられることもあるかもしれないし、縛り付け

られてしまうという感覚がぬぐえないのは仕方のないことである。(JS, j20-2, 意見文, C型)

- (19) しかし、今は安定的な収入もあるし、自分が稼いだお金でも十分生活ができます。(KS, k21-2, 意見文, C型)

理由をシ節で複数挙げるD型は、JS・KSでは見られなかったが、CSでは8例と比較的多く、うち7例は意見文での使用である。

- (20) 社会に新しい血が入られないし、若い労働力もないし、自然に社会の発展をだんだん遅くなって、これは国にとっては大変な問題である。(CS, C16-2, 意見文, D型)

シ節以外の節で理由を挙げる混合型のE型は、JSに7例、KSに6例見られた。

- (21) 少なくとも登下校中はほとんどイヤフォンをしてiPoDから音楽を聴いているし、多い日ではそれに加えて6時間程度バンドでスタジオ練習をすることもあるので、だいたい一日の4分の1から3分の1は音楽に接していると思う。(JS, j18-3, 歴史文, E型)

- (22) 町の壁にきれいな絵が描いていて散歩しながら絵も見られますし、きれいな写真も取ることができますので^{原文ママ}恋人同士デートコースとしても良いところだと思います。(KS, k18-1, 説明文, E型)

最後に、「～だろうし」のようにモダリティ形式と共起している例を見おきたい。シ節の前接動詞がなんらかのモダリティ形式と共起している例は、全部で21例確認できた。「～だろう／であろう」が5例、「～なければならない」が4例、「～たい」「～ばいい」「～かもしれない」が各2例、「～にちがいない」「～てもいい」「～らしい」「～ようだ」「～はずだ」「～べきだ」が各1例であった。

- (23) 景色というのは各地それぞれのものがあるであろうし、その魅

力もそれぞれであろうが、私は横浜の景色が一番だと思っている。(JS, j14-1, 説明文, A型)

(24) 相手のことも慎重に選ばなければなりませんし, 自分もいろいろと用意しないといけないことが多いです。(KS, k16-2, 意見文, A型)

(25) 私は以前のように授業中でこそこそ小説を読むことをしなくてもいいし, 品質がよく, 好きな本を膨大な時間で探してもいい。(CS, C57-3, 歴史文, A型)

以上, JCK 作文コーパス調査の結果を概観した。まとめると, 大学生の作文において, 日本語母語話者, 非母語話者を問わずシ節の使用が一定程度確認できるが, その多くは一文にシ節を一回のみ使用する累加用法(A型)であることがわかった。

5. シ節の文体に関する意識調査とその結果

5.1 意識調査の概要

第4節では, 大学生は作文であれば一定程度のシ節を用いていることが明らかになった。これらの使用が, より硬い書き言葉においても容認されるかどうかを明らかにするため, 17の用例を対象とした意識調査を行った。表4に各用例の特徴を, 表5に協力者(日本語母語話者6名, 非母語話者3名)の概要を示す。

表 4 意識調査の対象とした用例の特徴

No.	類型／シ節の前接語	執筆者／課題	9	A／～ようだ	JS／意見文
1	A／イ形容詞	JS／説明文	10	A／～ばいい	KS／意見文
2	A／動詞	KS／説明文	11	A／動詞（タ形）	KS／意見文
3	A／ナ形容詞	KS／説明文	12	B／イ形容詞他（×3）	CS／意見文
4	E／イ形容詞	KS／説明文	13	C／～かもしれない	JS／意見文
5	E／動詞	KS／説明文	14	C／ない	JS／意見文
6	B／イ形容詞（×2）	CS／歴史文	15	D／ない（×2）	CS／意見文
7	D／ナ形容詞（×2）	CS／説明文	16	D／動詞（×2）	CS／意見文
8	A／～であろう	JS／意見文	17	E／～だろう	JS／意見文

表 5 調査協力者の概要

NS-1	日本語母語話者，日本語教育を専門とする教員	50代
NS-2	日本語母語話者，日本語教育を専門とする教員	50代
NS-3	日本語母語話者，日本語教育を専門とする教員	40代
NS-4	日本語母語話者，日本語教育を専門とする教員	40代
NS-5	日本語母語話者，日本語教育学専攻の大学院後期課程 （ライティングの指導経験あり）	60代
NS-6	日本語母語話者，日本語教育学専攻の大学院前期課程	20代
NNS-1	日本語非母語話者，日本語教育学専攻の大学院後期課程	20代
NNS-2	日本語非母語話者，日本語教育学専攻の大学院前期課程	30代
NNS-3	日本語非母語話者，日本語教育学専攻の大学院前期課程	20代

17例の選定にあたっては、本稿で定めた類型と前接語にバリエーションをもたせるようにした。第3節でも述べたが、調査ではシ節を含む文の前後2～3文を1単位としたテキストとして提示し、「硬い書き言葉」（大学生が卒業論文で求められる程度を想定）として、ふさわしくない箇所にアンダーラインを引くこと、可能であれば修正案を書き添えることを求めた。また、調査後、必要に応じて判定の理由などを聞き取った。

なお、原文が丁寧体で書かれているものは、予め普通体に修正しておい

まず、母語話者の判定結果を見ていくことにする。一見して判断にはバラつきがあり、硬い書き言葉でのシ節の使用を認めるかは、個人差があることがわかる。とはいえ、判定に傾向がないわけではない。ここでは、母語話者6人中5人がふさわしくないと判定したグループ（番号が濃い網掛けになっている No. 3, 4, 7, 12, 15）と、逆に、ふさわしくないとという判定が1人のみだったグループ（番号に網掛けがない No. 1, 6, 8, 10, 17）と、その中間にあたるそれ以外のグループ（番号が薄い網掛けになっている No. 2, 5, 9, 11, 13, 14, 16）に分けて考察する。どのような特徴を持つ用例が、どのグループに位置づけられたかを見やすくするために、表4に網掛けを加えたものを表7として掲載する。

表7 判定結果を網掛け表示した調査対象

No.	類型／シ節の前接語	執筆者／課題	9	A／～ようだ	JS／意見文
1	A／イ形容詞	JS／説明文	10	A／～ばいい	KS／意見文
2	A／動詞	KS／説明文	11	A／動詞（タ形）	KS／意見文
3	A／ナ形容詞	KS／説明文	12	B／イ形容詞他（×3）	CS／意見文
4	E／イ形容詞	KS／説明文	13	C／～かもしれない	JS／意見文
5	E／動詞	KS／説明文	14	C／ない	JS／意見文
6	B／イ形容詞（×2）	CS／歴史文	15	D／ない（×2）	CS／意見文
7	D／ナ形容詞（×2）	CS／説明文	16	D／動詞（×2）	CS／意見文
8	A／～であろう	JS／意見文	17	E／～だろう	JS／意見文

硬い書き言葉としての容認度が低いグループ（No. 3, 4, 7, 12, 15）に共通する点に着目すると、前接語がナ形容詞であること（No. 3, 7）、シ節が複数であること（No. 7, 12, 15）、理由用法であること（No. 4, 7, 15）などが指摘できる。一部の例を挙げる。

- (26) また「ホンデ」には異色のカフェや小さい雑貨屋、クラブなどが多いし、いろいろな行事やストリートライブなどイベントもたくさん行われているのでいつも人が多い。（No. 4）

- (27) 地勢が大體平坦だし、土の栄養と水利資源も豊かだし、農業にはとてもふさわしい。(No.7)
- (28) 普段、毎日仕事が忙しいし、退社したあと時間が十分ではないし、それで仕事が終わったら、すぐに家に帰ってリラックスしたいし、そもそも出会いがなくなっている。(No.12)

実際に、複数の協力者から、「～だし」という言い方や「～し」の繰り返しは話し言葉らしさを感じさせるというコメントがあった。「当たり前であったようだ」が前接する No.9 も、このグループではないが、6人中4人がふさわしくないと判定している。

一方、理由用法 (C, D, E) であることは、必ずしも容認度の低さにつながっているわけではない。No.17 は、理由用法の E 型だが、もっとも容認度が高いグループに入っている。前接語が「～だろう」という形式をとる用例だが、同じく「～だろう (であろう)」が共起する No.8 も容認度が高い。

- (29) 晩婚化は、何かが決定的な要因として明示されるものというよりは最初に述べたように複合的な要因によって引き起こされるものであるだろうし、それぞれの国ごとによっても違いが出てきてしまうものであって判定は難しい。(No.17)
- (30) いろいろなことが複雑になっていく現代社会の中で様々な要因が絡み合って晩婚化が進んでいるのであろうし、考察は非常に困難を極めるであろうが、自分なりに考察してみたい。(No.8)

予想通り、テ形や連用形に置き換えられない「～だろうし」は、書き言葉において一定の役割を果たしていると言えそうだ。他のモダリティ形式に着目すると、「当たり前であったようだ」が前接する No.9 は、既に見たように容認度は比較的低い。「恋愛をすればいい」が前接する No.10、「あるかもしれない」が前接する No.13 は、容認度が比較的高い。意味的要因よりも、形態的要因が影響するのではないかと考えられる。

また、複数の協力者から、容認度はテキストの主題や構成にも影響されるようだというコメントが得られた。たとえば No.6 はシ節が複数使われているにも関わらず、6人中5人が容認しているが、特に NS-2 は、全体的にシ節の容認度が低いにも関わらず、No.6 を容認している。NS-2 から、No.6 のテキストは内容が個人的な体験のようなので、シ節の容認度が上がったという趣旨のコメントが得られた。実際 No.6 は「歴史文」の一部で個人的な経験を綴ったものであり、そもそも「卒業論文だとすると」という仮定で読むのに無理があったかもしれない。調査方法の課題として受け止めておきたい。

(31) とくに冬になると、ハルビンは寒いし、風も強いし、雪もよく降るのだ。(No.6)

今回、非母語話者3名(全員大学院生)にも調査に協力してもらったが、シ節は硬い書き言葉として不適切という認識を持っている院生(NNS-1, NNS-3)と、そのような意識がなかった院生(NNS-2)とで結果がはっきり分かれた。NNS-1とNNS-3に確認したところ、特に明示的な学習をした記憶はないが、普段論文などでシ節を目にすることがないので、そう判断したということであった。なおNNS-1はNo.1, NNS-3はNo.1とNo.10のシ節を容認している結果となっているが、これらはすべて、見落としをしたということであった。特にNo.1は最初のテキストであったため、よく読めていなかったのかもしれないということである。これも調査方法の問題点として指摘できる。

6. 結論と今後の課題

本稿では、限られた範囲ではあるが、シ節の文体情報について考察してきた。2.3で示した考察の観点を振り返り、得られた結論をまとめたい。

(32) 考察の観点((8)の再掲)

- ① 書き言葉において、初級教科書に見られるような、一文に複数のシ節を含む文型（B型およびD型）はどの程度使用されているか。また、そのような複数性は書き言葉らしさに影響を与えるか。
- ② 書き言葉において、「累加」と「理由」の使用に偏りはみられるか。特に、「理由」の「ほかし」「遠まわし」といったニュアンスは硬い文章に適さないと言えるか。
- ③ 「だろうし」という形式は他には置き換えにくいので、書き言葉でも一定の役割を果たしていると考えられるが、シ節にモダリティ形式を含むか含まないかは、書き言葉らしさに影響を与えるか。

上記に対応した結論は下記の通りである。

(33) 本稿の結論

- ① 初級教科書に見られるような、一文に複数のシ節を含む文型（B型およびD型）は、大学生の作文においては多く使用されているとは言えない。また、そのような複数性は話し言葉らしさを感じさせ、硬い書き言葉では不適切とみなされる可能性が高い。
- ② 大学生の作文においては、「累加」用法の使用が比較的多く、「理由」用法の使用は少ない。「理由」用法でシ節を用いると、硬い書き言葉では不適切とみなされる可能性が高い。
- ③ 「だろうし」という形式は他には置き換えにくいので、書き言葉でも一定の役割を果たしていると考えられるが、「だろう」以外のモダリティ形式については、意味上の性質が書き言葉らしさに影響を与えているとまでは考えにくい。

今回調査対象とした用例は原文が作文であり、硬い書き言葉としての容認度を問う調査としては、主題の面などで自然とは言えない点があり、方

法としての課題が残った。調査協力者からは、学問分野によっては、シ節は一律に不適切とみなされる場合があるという情報も得られた。シ節に限らず、大学等で硬い書き言葉の使用について指導する際には、各分野・領域による文体意識の差の存在にも留意し、断定的な指導は避けるべきであろう。一方で、使用基準が複雑になり過ぎることも望ましくない。今後、多様な分野の学術論文を調査対象として実態を明らかにし、考察を深めたいと思う。

《注》

- (1) 多くの先行研究ではこの用法を「並立」と呼んでいるが、テ形や連用形によって並べた場合との違いを明確にするため、本稿でも「累加」と呼ぶことにする。主な先行研究は前田（2005）に詳しく記されているので、そちらを参照されたい。
- (2) 「累加」（前田2005では「並立」）と「理由」の関連性については前田（2005）で詳しく考察されている。
- (3) 「～し、～し、～ので、～。」のように、DとEを組み合わせたタイプもあり得るが、シ節の複数性の影響を見たいので、このような例はD型に含めることにする。
- (4) シ節が複数現れる文は、「累加」も「理由」もどちらもあり得るが、北條（2002）の挙げている例では教科書では「理由」（D型）の用例が多いようである。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 石黒圭・筒井千絵（2009）『留学生のためのここが大切文章表現のルール』スリーエーネットワーク
- 市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- グループ・ジャマシイ（2023）『日本語文型辞典 改訂版』くろしお出版
- 友松悦子（2008）『小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク
- 中俣尚己（2014）『文法コロケーションハンドブック』くろしお出版
- 二通信子・佐藤不二子（2020）『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

- 日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版
北條淳子（2002）「並列を表す「～シ」表現について」『早稲田大学日本語研究
教育センター紀要』15：225-236
前田直子（2005）「現代日本語における接続助詞「し」の意味・用法——並列と
理由の関係を中心に」『人文』4：131-144 学習院大学人文科学研究所

「JCK 作文コーパス」nihongosakubun.sakura.ne.jp

付記：調査にご協力いただいた方々に記して感謝申し上げます。

（原稿受付 2023 年 10 月 27 日）